

『国民の創生』から『ブラックパンサー』へー進化する黒人ステレオタイプ

序論

映画『国民の創生』(*The Birth of Nation*, 1915)は、南北戦争前後のアメリカを舞台に、北部の政治家オースティン・ストーンマン(Austin Stoneman)の娘エルジー(Elsie)と南部のキャメロン家の長男ベン・キャメロン(Ben Cameron)との恋物語を描いた作品であり、無法者の黒人が、白人のクランズマンに一扫され、南部の社会が戦前と同様「黒人が白人に従う社会」に戻るまでを描いたフィクションである。

白人至上主義団体 KKK (クー・クラックス・クラン) の宣伝映画としての役割を果たした『国民の創生』は、南北戦争後の黒人を否定的にステレオタイプ化して描いている。赤尾は、『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』において南北戦争後の黒人と白人の関係性について次のように論じている。

アメリカ合衆国が南部と北部に分かれて戦った南北戦争(1861-65)は奴隷制度廃止を訴えた北部が勝利をおさめ、ついに奴隷は自由の身となった。しかし、奴隷解放によって黒人に対する偏見が簡単に消滅することはなかった。とくに、奴隷を一種の家畜と考えてきた南部の人種差別主義者にとっては、黒人が白人と同等の存在になるのは認めがたいことであり、奴隷制度に代わる人種分離のしくみや社会的ルールを欲した。(47)

この黒人に対する偏見や黒人差別の考えを反映し、白人の視点から「黒人はこのような存在である」と固定概念を持って、黒人キャラクターをステレオタイプ化して映像が多いの

がこの作品の特徴である。

『国民の創生』が公開されてから 100 年以上経った 2018 年に映画『ブラックパンサー』(*Black Panther*) が公開された。『ブラックパンサー』は、高度な科学技術を持った国ワカンダの若き国王ティ・チャラ (T'Challa) がブラックパンサーというヒーローとして、白人の武器商人ユリシーズ・クロウ (Ulysses Klaue) の襲撃や、自分のいとこであり、王位継承権を持っていると発覚したエリック・“キルモンガー”・スティーヴンス (Erik “Killmonger” Stevens) がたくらむ世界制覇の野望から自国ワカンダと世界を守る姿を描いたスーパーヒーロー映画である。

『ブラックパンサー』は登場人物の大半が黒人であり、白人の主要登場人物は CIA 捜査官のロスと武器商人のクロウの 2 人しかいない。また、監督が黒人で、制作スタッフの大半が黒人であったこと、ブラックパンサーがマーベル・スタジオで初の黒人ヒーローとなったことで注目を集めた。

本論文では、映画『国民の創生』の登場人物と、映画『ブラックパンサー』の登場人物を比較していく。『国民の創生』では、黒人ステレオタイプが勢ぞろいする。すなわちアンクル・トム、マミー、クーンとピッカニーニ (子ども時代のクーン)、ムラトー、バックの 5 つのタイプである。『国民の創生』で黒人キャラクターが否定的に描かれているのは明らかである。一方、『ブラックパンサー』には、一見これらの 5 大ステレオタイプと類似するキャラクターが登場するのだが、そこには、この映画の制作者たちの意図があると思われる

る。本論では、黒人ステレオタイプの表象を軸に、『国民の創生』と『ブラックパンサー』の登場人物を比較考察し、その違いの意味することを考察していく。

(第 I 章～V 章は中略)

結論

本論では、映画『国民の創生』の登場人物と、映画『ブラックパンサー』の登場人物を比較考察した。

第 I 章では、『ブラックパンサー』のズリと、『国民の創生』のアンクル・トムのキャラクターを比較分析した。ズリはアンクル・トムのキャラクターのマジカル・ニグロ的な性質をもっている。ただし、アンクル・トムのキャラクターと違うのは、超自然的な力を発揮して、みずからを投げうって助けるのは黒人主人公であるという点である。それに加え、ズリのマジカル・ニグロ的な性質が作品の進行につれ希薄化し、マジカル・ニグロ的な性質が消失していく様子が描かれている。彼は、登場したときは異様な、摩訶不思議なキャラクターに見えるが、だんだんと等身大の人間として描かれるようになるのである。

第 II 章では、『ブラックパンサー』のオコエ将軍と、『国民の創生』のマミー的キャラクターを比較分析した。登場したときのオコエは怒りっぽく、男性に負けまいとして好戦的になっているような、過度にパワフルなイメージがある。その一方で主人に対して忠実で

あるという性質をもっている。つまり、マミー的キャラクターに似たイメージがあるのである。

しかし作品が進行するにつれ、オコエは、こうしたマミーとは異なる「聡明な女性」という要素が強調されていく。それと共に、白人には従わず、自分の住む王国の王となった人物にこそ、将軍の立場で忠誠を誓うという人物である。オコエの賢さ、公平さ、そして洗練された戦い方を見ると、彼女は、マミー的キャラクターの「知的能力が白人より低くて、かんしゃくを起こす様子がコミカル」といった要素はなく、強さと聡明さが強調されていることが分る。

第Ⅲ章では、『ブラックパンサー』のウカビと、『国民の創生』はじめアメリカ映画に登場するクーンのキャラクターを比較分析した。ウカビは国境地帯で農耕牧畜をしてのんびり平和に生活する一方、自分の現状には不満を持っている様子である。この「のんびり暮らしつつ現状に不満」というキャラクターはクーンと一致する。

また、物語のクライマックスで、ここぞという場面でエリック・キルモンガーに与するという作戦に出るが、よい結果を生まず、結局はオコエ将軍らの前にひれ伏す様子も、愚かなクーンの役どころと似ている。

しかし、ウカビがクーン的キャラクターと異なるのは、浅はかな考えを持ち、愚かな選択ばかりしているものの、最後にはボーダー族をまとめる族長として賢明な判断を下す人物へと変化する点である。

第IV章では、『ブラックパンサー』のウンジャダカと、『国民の創生』のムラト—的キャラクターを比較分析した。ウンジャダカは、明るい肌の色をしており、人種的にはムラト—そのものである。キャラクター面を見ると、計画的で知能も高く、性的魅力がある。状況を見て立場を切り替えていくずるがしこい性質を持ち、『国民の創生』の暴力的で野心的なリンチのようなバック的性質も併せ持つキャラクターであるかに、描かれていく。

しかし、ウンジャダカがムラト—的キャラクターと異なるのは、作品が展開するにつれ、父への思慕というごく人間的な感情を持つ人物であること、父に置き去りにされたことへの恨みが彼の性格の根本にあると示される点である。彼は自分の確固たる意志や想いを持っており、それによりブラックパンサーになるという願いが叶う点も、「策に溺れて結局は失敗する」ムラト—とは異なるのである。

第V章では、『ブラックパンサー』のエムバクと、『国民の創生』のバック的キャラクターを比較分析した。登場シーンでのエムバクは野卑で暴力的な様子が強調される。野生的で乱暴なジャバリ族の男たちの中でも飛びぬけて強く、そのジャバリ族をまとめるリーダーであり、バック的な存在として描かれているようにも見える。

しかし、バックと異なるのは、途中、主人公が危機にさらされる場面で主人公を助ける点である。また、欲望に駆られ、暴力をふるうのではなく、自分の理性やポリシーを持って行動している人物であることが、だんだんわかってくるのであり、重層的なキャラクターである点も、ステレオタイプのバックとは異なる。

1915年に公開された『国民の創生』は、南北戦争前後の黒人キャラクターを否定的にステレオタイプ化して描き、白人主人公らの引き立て役とした。一方、2018年に公開された『ブラックパンサー』に登場するキャラクターは、『国民の創生』に登場するキャラクターに一見すると似ており、まるで往年の黒人ステレオタイプを再現しようとしているかに見える。しかし、ストーリーを追っていくと、その姿は監督や脚本家によって「進化」させられたステレオタイプであることが分かる。

1915年から2018年へ、約100年かけ、『ブラックパンサー』の監督や脚本家は、『国民の創生』のステレオタイプの黒人キャラクターをひとひねりし、人々の心に深く刻まれている黒人キャラクターへの先入観をひっくり返そうと試みたのではないだろうか。それぞれのキャラクターは、一見すると往年のステレオタイプを彷彿とするキャラクターである。しかし、彼らは途中で意外な成長を見せたり、隠れた側面を露呈したりする。予想外の展開を見せることにより、「予想を裏切る」娯楽映画として成功させたのである。